

# 疑わしき母性性

——比較心理学的考察——

関 口 茂 久

## はじめに

人間の親子関係に関する心理学的学説の多くは、母親には生得的な母性本能ないしは母性性が備わっている、それが母性行動を動機づけることによって特異な母子関係を形成しているという考えに基づいている。ところが、ゲッ歯類 rodents や霊長類 primates においては、母親以外の雌や雄が、子どもを養育したり世話をしているという事実が報告されている。このような事実は、動物の養育行動が母親に固有の行動ではなく、動物の親子関係は、母子の相互作用によるだけでなく、母親以外の個体との行動的な関係によって維持していることを示唆している。

一般に、心理学的な見方には、西欧哲学の伝統にある人間中心の準拠枠に束縛されて人間に焦点を置くあまり、哺乳動物一般に共通する多くの事柄も人間固有のものであると見なす傾向がある。このことは、一方では、人間行動を動物の次元から切り離すことによって、形而上学的な傾向を強めることになり、他方では、動物の行動を外的な事象として見なすことによって、動物の内面性を軽視した極端な機械論的還元主義に陥る危険性をはらんでしまうことになる。このような見方はまた、デカルト以降の近代合理主義思想の基礎にある人間と動物とを不自然に区分したまま確立した自然科学的定式が定着しているからであろうが、元来人間行動の真の理解は、人間と動物との心的連続性を認めることによって、あるいは両者の心的過程には相互に補完し通じ合うものが存在するという前提に立って、初めて達成することができるものであらうと考えている。

筆者は、この10数年間にわたって人間の親子関係を比較心理学的に考察するために、動物の養育行動を研究し考察して来た。その間に得られた多くの事実に基づいて、筆者は、人間の養育行動が母性愛とか母性性という謎めいた概念で説明することができないこと、さらに親子関係には、人間と動物とに共通した行動原理が存在することを明らかにしようと考えた。この点に関する理論的考察は、近著の中で詳しく述べているが、本論文においては、筆者の基本的な視点について論考する。

### 人間の親子関係理論における問題の所在

親子関係に関する心理学的学説は、母性行動 maternal behavior を基礎とした母子関係理論によって体系化されている。最も代表的な親子関係理論であるフロイドの学説には、心的外傷 psychic trauma という概念が中心にあり、乳幼児期の母と子の性的関係のあり方が、その後の人格形成に決定的な影響を及ぼすと見なしている。この見方は、その後エリクソンによって、人間の自我発達を自己同一性 self identity の確立によって解釈する学説へと発展した。しかしながら、彼の学説の基礎にも、母と子の結びつきの強さが、乳幼児期から性的成熟の潜伏期を経て、思春期・青年期・成人期の各々における生理的心理的変化に影響するという考えがある。さらに、第二次世界大戦後の混乱した社会状況の中から生まれたボルビーの愛着理論 attachment theory の背後にも、フロイドの心的外傷に基づく考えがあることを見のがすことができない。母と子の間に形成する愛着行動は、生後の一時期に起きる身体的ないしは心理的な母子分離 maternal deprivation or separation によって、その後の人格形成に非可逆的な影響を及ぼすであろう、とボルビーの学説では説明している点である。<sup>1)</sup>

1) フロイド S. Freud の精神分析理論は、催眠療法と自由連想法の完成によって確立した学説であるが、その基本的概念の一つには、心的外傷説がある。また、フロイドの無意識・意識の二重構造論は、自我の発達の重要な仮説として、心理学に及ぼした影響は強い。フロイドの著作集は、「フロイド選集」として出版されているので、ここでは割愛する。

E. H. Erikson **Psychological Issues: Identity and The Life Cycle**, M. Paterson, England, 1960.

このような精神分析的な親子関係理論に対して、1960年代に登場した初期経験理論は、母と子の行動的な相互作用を学習理論によって説明しようとしたけれども、この理論もまた、親子関係の中心に母子関係を置き、発達の初期における母親からの子どもへの刺激づけの程度が、成熟後の情緒的認知的発達に重要な影響を及ぼすことを前提にしていたのである。

ㄨ エリクソンの自己同一性の概念は、社会から自分が是認されているという自信 self esteem と安定感を基礎としている「母の愛 mother love」を源泉としている。この概念は、また個体の生命サイクルを介して自我 ego の発達を完成する働きをもつものであると考えている。この生命サイクルにおける母性性 maternityこそ、自我の完成点であり理想的な世界であるともいえる。

J. Bowlby **Maternal care and Mental health**, 1951. (黒田実郎訳 乳幼児の精神衛生, 岩崎学術出版, 東京)

ボルビーの愛着理論は、この小論文において初めて登場した学説であり、彼の3部作といわれている『母性性の喪失 Maternal Loss, Vol. 1, 2, 3』の中心に置いている。他方、母性性の喪失による子どもの分離不安症候群は、臨床的概念であるホスピタリズム hospitalism という用語によっても説明されている。この用語と類似した意味に使われる用語が、マターナル・セパレーション (母子分離) とかマターナル・デプリベーション (母子剥奪) という用語である。これらの用語は、母親からコドモが物理的分離されたり長期に隔離される状態をいい、乳幼児が長期間わたって施設 institutiton とか病院 hospital に隔離されることによって生じる疾病や症候群を説明するために用いられるようになった。このようにして、ホスピタリズムの問題は、母子関係の中心的な問題へと発展し、親子関係の心理学的研究を盛んにした。しかしながら、これらの概念には、母子の物理的分離ないしは隔離の何がコドモの発達に影響するかは明らかではない。

2) 藤田統・祐宗省三・関口茂久・高橋たまき・村尾能成編 **初期経験と初期行動**, 誠信書房, 東京, 1977.

初期経験理論 early experience theory は、実験心理学者と臨床心理学者とが親子関係に関する諸問題について行った研究の結果提唱された学説を代表している。この研究は、発達の初期における母子関係の欠落とか剥奪が、その後の個体の身体的成熟と心理的発達に重大な影響を及ぼすならば、母子関係には何らかの行動的な相互作用が働いているはずであろうという作業仮説を実験的臨床的に検証することを目的として行われた。ここで、心理学的に検討すべき問題は、母から子への刺激づけの関数としての子どもの成長と発達に及ぼす従属変数を解明することであり、したがって、個体の心理学的な発達過程に心的外傷がいかなる働きをもっているかを仮説的な命題においているわけではないが、研究者の中には、フロイドの心的外傷説をどのように解釈するかにこだわっていた面もあることは否定できない。

### 母性行動に関する実験的生態学的研究

1933年に、イギリスの遺伝学者ウィスナーとシェアードは、ラット *Rattus norvegicus* の母性行動が授乳中の雌のみならず性的未経験の雌においても現れることを、実験室実験において実証した。彼らの研究において、ラットの母性行動には、授乳活動 lactation 以外に巣造り活動 nestbuilding, 仔運び活動 retrieving, 防御活動 defence activity, 仔なめ活動 licking activity と授乳姿勢 nursing posture 等の行動があり、これらの行動がラットの養育行動として重要な働きをもつことを明らかにしたのである。<sup>3)</sup>

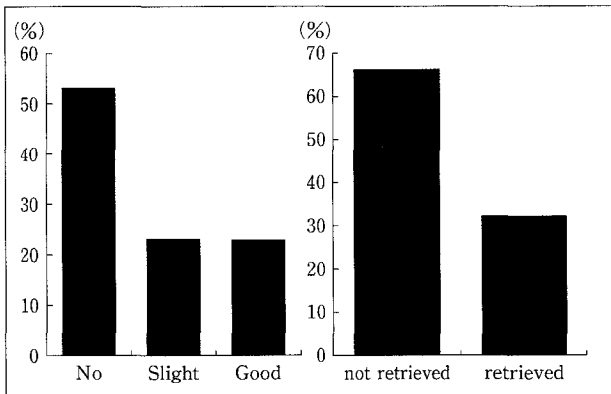


図 1. ウィスナーとシェアードは、250匹の未経験のナローウ雌ラットを用いて提供母の新生仔と同居させる実験を行った。その結果、巣造り活動を現した雌ラットは約50%であり、巣の中で新生仔を腹の下に抱えていた（左図）。また、約30%強の雌ラットは、新生仔を口にくわえて巣に運び込んだ（右図）。この実験において、彼らは、ラットが新生仔を口に加えて運ぶ活動を仔運び retrieving activity, 腹の下に抱え込む姿勢を湾曲化 concaveation と定義して、これらの行動型が養育行動の指標であることを実証した。

(Wiesner & Sheard, 1933, p139-169 より作図)

3) Wiesner, B. P. & N. M. Sheard **Maternal Behaviour in the Rat.** Oliver and Boyd, London, 1933.

その後1967年に、アメリカの比較心理学者ローゼンブラットは、ラットの母性行動の発現と維持が、新生仔 neonate と同居することによって現れ続けることを実験的に再確認した。この研究において、ラットの母性行動の発現は、妊娠・出産に伴うホルモンの内分泌によって促進するだけでなく、新生仔からの刺激づけがあれば雄ラットにも現れることを実証したのである。<sup>4)</sup>

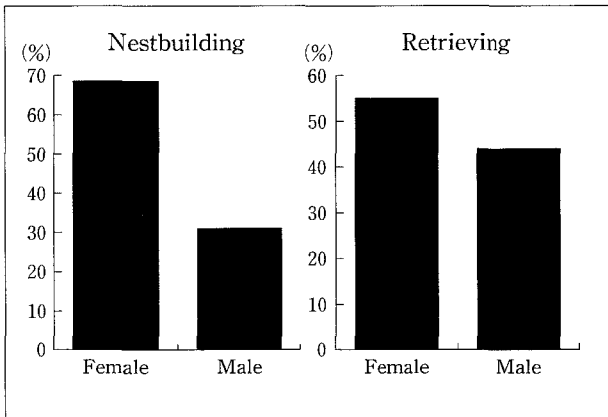


図2. ローゼンブラットの実験において、性的未経験のラットが提供母の新生仔と同居してから巣造り活動（左図）を現わした個体率は、雌が約70%雄が約30%であり、また、仔運び活動（右図）を現わした個体率は、雌が約55%雄が約45%であった。また、新生仔を巣に運んで仔なめ活動 puplicking と授乳態 nursing posture の出現率についても、雌雄のラットに差異は見られなかった。（Rosenblatt, 1967, p1512 より作図）

- この研究書は、最近の親子関係に関する研究論文に最も多く引用されている書物として高い評価を受けている。その理由は、ラットの母性行動を授乳活動だけでなく、巣造り活動と仔運び行動とを指標とした点である。このような優れた研究が何故30年近く研究者に注目されなかった理由には、人間の母性性への過信による意図的な無視が母性行動を研究する研究者の念頭にあったのではないかと、筆者は推測する。

- 4) Rosenblatt, J. B. Nonhormonal basis of maternal behavior in the rat. *Science*, 156, 1512-1514, 1967.

この論文は短報であるが、その研究結果の反響は大きい。われわれも、この論文を読むことにより、親子関係の研究に着手した。ローゼンブラット教授が見いだした、ラットのノ

他方、野生の動物とくにニホンザル *Macaca fuscata* (伊谷, 1964, 1974: 長谷川, 1990) や霊長類 (西田, 1987) に関する生態学的研究において、母親以外の個体が養育行動を現すことが発見された。たとえば、西田の研究によれば、チンパンジー *Pan troglodytes* の子守り行動 care-taking behavior には、母親以外の個体が赤ん坊を抱いたり、運搬したり、毛づくろいしたりあるいは遊んでやったりする行動が観察され、これらの行動が赤ん坊の行動発達を促すばかりでなく、チンパンジーの社会的行動の発達に重要な役割を果たしていることが明らかに<sup>5)</sup>なった。

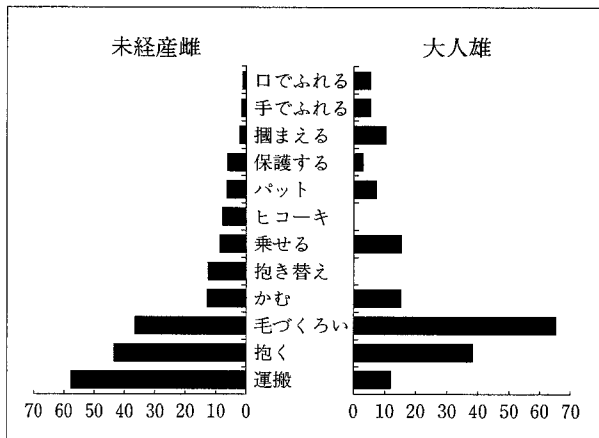


図 3. アフリカ・タンザニア州のカソゲ地区に生息する野生チンパンジーの社会においては、母親以外の未経産の雌や大人の雄でも赤ん坊の世話をすることが観察されている。上図に示したように(数値は発現率)、チンパンジーの子守り行動は母親以外の個体に様々な行動形態が現れていることが確認された。雌のチンパンジーが子守りするのは、将来自分たちが母親になったときの予行演習的な意味があり、雄のチンパンジーの子守りには、母親にとっては気苦勞なことであろうが、赤ん坊にとっては将来集団のメンバーになるための交き合いの始まりとしての意味がある。(西田, 1981, p65 より作図)

5) 母性行動が雌性および雄性ホルモンに依存しない行動であるという発見は、哺乳動物全般に見られる事実であることが続々と確かめられたのである。

さらに、われわれの実験室においても、マウス *Mus musculus* の養育行動が雌のみならず雄にも現れること、父親となった雄は、交尾した相手が産んだ仔（自仔）でも、別の雄との間に生まれた仔（他仔）に対しても、典型的な養育行動を現すことが確かめられている。<sup>6)</sup>

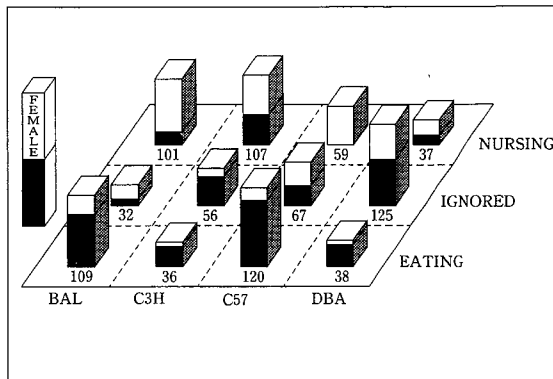


図4 A. 遺伝的に均一化した近交系マウスの4系統 (BAL, C3H, C57, DBA) において、オスマウスも提供母の新生仔に対して養育行動 nursing を現すことが分かっている。また、その他の行動型（無視する行動 ignored や仔殺し行動 eating）についても、系統の遺伝的差異によって発現数が異なることがわかった。（関口, 1989, p39 より引用）

- 5) 伊谷純一郎・池田次郎・田中利男編 高崎山の野生ニホンザル, 勁草書房, 東京, 1964.  
 伊谷純一郎 霊長類の社会構造 共立出版, 東京, 1974.  
 西田利貞 野生チンパンジー観察記, 中央公論社, 東京, 1981.  
 長谷川真理子 野生日本ザルの育児行動, 海鳴社, 東京, 1983.

伊谷博士（京大名誉教授）らの研究において、日本ザルや霊長類において母親以外の個体が子育て行動を現すことが初めて観察され、長谷川博士によって、日本ザルの野生集団において母性行動が何故母親以外の個体にも現れるかを、自然人類学者の目を通して詳細に考察された。

- 6) Kodama, N., T. Akuta, K. Nakamura & S. Sekiguchi Maternal Behavior, Maternal Aggression, and Maternal Pheromone in Rats and Mice: A bibliography (1968-1978), *Bulletin of Faculty of Education, Shiga Univ.*, 1979, 29, p23-41.

関口茂久 子育ての生物心理学, プレーン出版, 東京, 1985.

関口茂久(編) 特集「動物の生得的行動」, 遺伝, 1988, 42, p4-38.

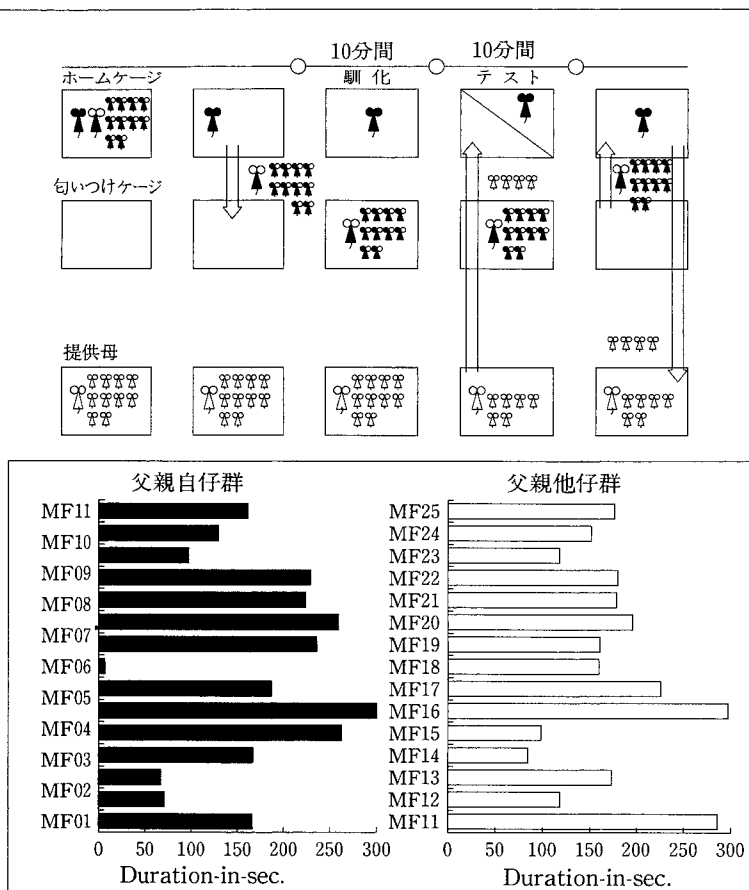


図 4 B. 実験室マウス (Slc: ICR) を用いて行った実験において、交尾した相手の仔 (自仔) と別のオスマウスと交尾して生まれた仔 (他仔) に対する父親マウスと母親マウスの養育行動を比較した。上図は、父親マウスが他仔に出会う観察法を図解したものであるが、ホームケージに両親と同居していた自仔を匂いづけ用ケージに母親と共に移し、父親マウスだけのケージの中に提供母の他仔を入れる。観察は、1 日 10 分 4 日間にわたって行う (この手続きは母親他仔群についても同じ)。下の図には、父親マウスが自仔と他仔に対する巣造り活動の総持続時間を示したが、両群間に統計的な差異が見られなかった。

(水原敏子他, 日本動物心理学会報告, 1993 より作図)



以上の研究によって、動物の養育行動は、雌に固有な行動ではなく、新生仔からの刺激づけによって発現することが確認されたのである。

### 適応行動としての養育行動の役割

動物における養育行動に関する研究から、この行動が母親以外の個体にも現れることが分かった。それでは、このような事実が人間の親子関係理論にどのような影響をもたらすか、そして、人間や動物の親子関係とは何かについて、次に考察を進めることにする。

1975年に開催された、Ciba Foundation Symposium “Parent-Infant Interaction” に関する国際会議において、主催者の一人であるホファー教授は、過去10数年間における親子関係に関する研究は、子どもの情緒的認知的能力が母親からの初期の刺激づけによっていること、身体的成熟や疾患に対する抵抗性が母親によって高められること等を解明することができたが、『われわれ研究者は、ラットや霊長類の養育行動が哺乳動物の生命維持にとって如何に基礎的な活動であるかを見のがしていたことを反省しなければならない』と述べている。さらに、この会議において報告したアメリカの小児科医クラウスとケンネルらは、人間の母親と新生児との間には特異な絆の形成 bonding が存在することは事実であろうが、ボルビーが提唱した愛着とか愛着行動による働きは、基本的には子どもが母親に接近し接触を維持する活動であり、危険からの保護と生理的必要な充足をもたらす行動である。したがって、親子関係を維持する上で母親の愛着行動を見直すとすれば、この行動が子どもの生存にどの程度寄与するかという視点が必要であろう、と提言している。<sup>7)</sup>

ㄨ 関口茂久 インファントサイドを抑える行動原理, *Scientific American* 日本版サイエンス, 1988, 2, 70-77.

関口茂久 仔育て・仔喰いの行動情報メカニズム, p37-41, **生体情報の伝達過程に関する学際的研究**, 教育研究学内特別経費研究報告書 (井深信男教育学部教授代表), 1989.

7) Hofer, M. A. Introduction. p1-3. In **Ciba Foundation Symposium 33**, Elsevier, Amsterdam, 1975.

Klaus, K. M. & J. H. Kennell Does human maternal behaviour after delivery show a characteristic pattern?. p 69-101. In **Ciba Foundation Symposium 33**, El-

人間の新生児は，出生直後には 1 日 24 時間の養育を必要とする。その期間は，数カ月から数年間にわたって持続し，親の養育は子どもが生殖能力をもつまで必要である。母親の愛着行動が子どもの生存に必要なということは，乳幼児期においては生命を支えることであるが，子どもが自立した段階においては，母親の外に父親および家族等との人間関係が，子どもの社会的行動の形成を促進する。また，出生直後の母親が，わが子をあやしたり見つめたりキッスしたり抱きしめたり，あるいは顔と顔を合わせたりする愛着行動も，母親にのみ特異な愛情があるからではなく，出産に立ち会った人々にも自発的に現れる行動であることから，愛着行動は，子どもに対する人間行動のレパトリーの一部であると云える。

このように，養育行動とは，生まれたばかりの赤ん坊を養育したり世話をするという社会的行動であり，その行動を通して子どもが，集団に帰属し社会的に成熟するイニシエーションであると考えることができる。養育行動が社会的行動であることは，この行動を行う個体が，雌であれ雄であれあるいは若い個体であれ年老いた個体であれ，行動の主体者にとっても生存上に何らかの利益があること，また生存上に有利に働く行動とは，養育行動が適応行動であることを意味している。しかしながら，生物学的には母親の養育行動には，繁殖行動としての適応的価値があるが，母親以外の個体にとっては，養育行動は余分なエネルギーを消費する行動であるので，それがどうして適応的であるかは，従来の心理学的な理論では説明することは難しい。

現段階においては，この点に関する説明としては，トリバースによって提唱された親の子に対する投資説が最も説得力のある理論である。トリバースは，親の子どもへの養育行動の適応的意味を，以下のように定義している：

“any investment by the parent in an individual offspring that increases the offspring's chance of surviving (and hence repro-

---

↘ sevier, Amsterdam, 1975.

Klaus, K. M. & J. H. Kennell **Maternal-infant bonding: The impact of early separation or loss on family development**, The C. V. Mosby Co. N.Y. 1976.

ductive success) at the cost of the parent's ability to invest in other offspring (1972, p139)”。

この考えによれば、親の養育行動は、わが子の世話をすることによって自分の子孫を確実に生き残すために先行投資する行動であり、親子の間に形成する関係は、その個体自身が集団に帰属することを保障するためであるということになる。したがって、個体の行動は、集団の目的にかなった方向に進化するというよりも、個体自身の適応性を高めるための利己的な目的に合致した行動であると解釈することができる。このことは、さらに動物社会において、若い雌が生まれたばかりの赤ん坊の世話をしたり、雄が子どもを養育したり保護する行動には、それらの行動を通して、自分の利益 benefit となる繁殖成功 reproductive success を高めるだけでなく、自分たちの損失 cost が、子どもの利益を高めることになるからだ<sup>8)</sup>と解釈することもできる。

このように、個体間における損失と利益の相互互惠性 reciprocity は、親子関係における養育行動だけでなく、個体の社会的行動としての援助行動 helping behavior とか個体間に見られる協力行動 cooperation を支える行動原理にもなっている<sup>9)</sup>。

### 人間社会における母性性の社会的認識の変化

人間社会においては、元来出産は、妊婦が産ませてもらうために産むのではなく、産むことが自分達の子孫を残す行為であり、その行為が夫婦の協同によって営まれるものであるという認識があ<sup>10)</sup>った。

8) Trivers, R. L. The evolution of reciprocal altruism. *Quart. Rev. Biol.* 46, 35-57, 1971.

Trivers, R. L. Parental investment and sexual selection. p136-176. In B. Campbell (Ed.)

**Sexual selection and the descent of man. 1871-1971.** Aldine, Chicago, 1972.

Trivers, R. L. Parent-offsprins conflict. *Amer. Zool.* 14, 249-264, 1974.

9) 関口茂久 利他行動の比較心理学的研究, 第I部, 第1章, ソフィアKK, 東京(印刷中)

10) 松岡悦子 出産の文化人類学, 海鳴社, 東京, 1985.

この書物には、出産育児が助産婦によって実施指導されていた頃の記録と比較文化的な事実に基づき、女性にとって出産とは何かという問題について考察している。

ところが、現代社会における出産は、両親から産婦人科の医師と麻酔医と看護婦への手にゆだねられ、当事者である夫婦の関係から離反してしまっている。このような出産に関する社会的変化は、出産時に起こる母親の様々な障害や新生児の死亡を激減させることができたであろうが、出産自体は、医師らを主役とする状況へと変容し、あらゆる医学的方法を駆使することによって人工化させられている。そして、人間の妊娠もまた、排卵誘発剤による受胎調節とか人工受精等の医学的人為的操作によって調節可能となり、子どもを何時産むかは、母親や父親の意志とは無関係に、医師らによって自由に調節できるようになった。

また、このような社会的変化は、育児に関しても大きく影響している。それは、「人工乳」の開発である。人工乳は、母親が自分の乳首から出る乳を赤ん坊に飲ませる母乳哺乳 breast-feeding から、哺乳瓶の中に入っている人工栄養物をゴムの乳首を吸わせる瓶哺乳 bottle-feeding へと大きく変えた。この人工乳の開発は、母親がいなかったり、母乳が十分出ない乳児に栄養を供給することができること、母親でなくとも父親や第三者が哺乳瓶から乳児に栄養を与えることができること、そして母親から肉体的な拘束を解除する等の利点をもたらした。中でも最も重大な変化は、授乳者が母親に代わって父親ないしは第三者の手にゆだねることができるようになったことである。

このことは、皮肉にも母性性が女性の本能であるという信仰を揺るがせたことになったのである。日本の古代文学の作品を通して、親子関係、子育て、そこに存在する母と子の関係を考察した服藤は、中世的社会の到来を感じさせる王朝社会において、子どもは、母のものであり親に従属するものであるから、子どもの生殺与奪の権は、母親に握られていたと指摘している。そのような時代において、授乳をはじめとする細々とした養育の主要な担い手は、代理母としての乳母であったこと、その時代の子どもは、母親から直接授乳してもらわなくても、母親や父親が側にいるだけで心強く感じる存在であった。他方、乳母を雇えない庶民の子育てにおいても、母親が自分の乳を与え子育てをしながら、農作に従事しなければならないが、そこでは年上の兄や姉あるいは老人た

ちが、母親に代わって幼い妹や弟や孫の面倒を見ていたこと、また母親の中に乳のでない者がいる場合には、それぞれの村落共同体や親類の結合による相互扶助により、授乳が行われていたこと等を指摘している。<sup>11)</sup>

このように、人間社会における養育行動における母親の役割は、古代から現代における歴史的変化によって変わってきたのであり、養育行動は、女性に生来的に備わっている母性性によるのではなく、母親以外の者が代わって行うことができる社会的行動としての役割をもっていたのである。

### むすびに代えて

本論文において考察した点を要約すれば、第1には、養育や子育てに関する行動が、女性や雌に固有な本能的な欲求によって誘発するものではないということである。そして、第2には、人間の母親において、子どもに授乳するという行為ですら、母親以外の者の手にゆだねることができるということである。第3には、出産や哺乳を巡る社会的変化が、伝統的な母子関係の図式を巡る社会的関係に重大な影響を及ぼしていることへの認識を覚醒させたということである。第2と第3の点については、既に筆者は、母子分離不安の人間学を提言した論文において、サルやネズミの動物実験から、われわれ人間の本来的な姿を求めるきっかけを得ることができるばかりでなく、親子関係を母子の相互作用に限定する学説が臨床的な異なる関係による理論的に偏った見方であること

11) 服藤早苗 平安朝の母と子：貴族と庶民の家族生活史，中公新書，東京 1991.

この本は、女性史の研究者としての著者が、専門の古代日本文学の世界における親子関係の実像に迫る内容が考察されている。この本はまた、日本人の祖先がどのようにして子育てを行ってきたか、そして古代・中世社会における親子関係とはどのような姿であったのかを考察している。さらに、古代の貴族社会における養育と育児が母親から乳母に代わることによって、母親の授乳は停止し、妊娠を促進する結果となり、貴族社会の権力機構は、より多くの子孫を残すことによって、その権力を拡大させることができるであろう、他方、庶民や農民社会における母親は授乳を続けることによって、妊娠を抑制し多産を自己防御するという構図が隠されている、と服藤さんは指摘している。この指摘は、人間社会における子育てとか親子関係が歴史的・文化的な発展過程において進化することを示唆している。

を指摘している。<sup>12)</sup>

第 1 の点については、本論文において考察したように、人間や動物の養育行動とは、自分たちの子孫を生き残すための適応行動であり、この行動は、本来食べ物を子どもに分け与えたり、病気の子どもを看護したり、子どもが危険な状況等に遭遇した時、親が身の危険を顧みずに保護する行動として進化した社会的行動であるということになる。したがって、このような行動は、雌に固有な行動として遺伝的に進化したのではなく、個体が生存に必要な社会的行動として文化的進化によって受け継がれる行動である、と結論することができる。

最後に、人間と動物の親子関係を比較考察することは、今問われている最も深刻な人間の親子関係を巡る諸問題に対して、一つの突破口を切り開くための新しいパラダイムを提唱する可能性を明示することができる。また、この作業は、近代において確立した「人間中心の考え」の根底にある深淵なる断層を露出させ、そこから脱出するための模索を可能にするであろう。その模索の方法が悪名高いアリストテレス流の擬人主義に立ったとしても、「人間中心の考え」が、如何に人間行動を真に理解する思索を歪める状況を醸成しているかを明らかにすることができるのではないかと考えている。

**謝辞** この度、経済学部教授水地宗明先生の定年退官記念号に投稿する機会を得ましたことは、私にとって誠に光栄に存じています。水地先生と私の出会いは、「滋賀大学の将来を語る会」に同席した時以来でありまして、水地先生を通して、多くの友人を得ることができましたことに感謝しています。それ以来、私は、経済学部に出講した時とか本部での会議の合間には、先生の研究室に押しかけてお邪魔する機会を得ることができました。その間今日まで、水地先生からは、公務についてのみならず学問的にも、多くのご指導を頂いて参りまし

12) 関口茂久 絆を断たれて、p41-66. **心の実験室 2**, 福村出版, 東京, 1977.

この論文において、ハーロウ H. W. Harlow の母子分離不安に関する実験的事実を詳細に紹介し、発達の初期に母親から隔離された子ザル *Macaca macacus* が慢性的な常同行動 stereotypic behavior を現すだけでなく、所属集団である動物園のサル島への社会復帰が不可能であることを考察している。

た。水地先生が定年を迎えられるということは、何年も前から分かっていることですが、来年からは、先生の研究室に伺う機会が失われることになると思うと、私にとって、滋賀大学から大事な研究室が失われる程の大打撃であります。

筆を措くに当って、水地先生から受けた多くの学恩に深く感謝している次第です。